

# 園長だより NO91

入園進級から早いもので3か月が経ちます。子ども達の生活も徐々に軌道にのりはじめてきました。

程よく安定に向かっていくものの安易に楽観的に考えてはいけないと思っています。それぞれ、ひとりひとりの子どもの安定を考えるともう一度、生活の基盤を見直し、子ども、(子ども達)の生活を子どもの地点に立ち、作り直していくことが課題と考えています。

## 乳児の担当制と母親の安心感

担当制？ 何だろう？ 一般社会における担当とは、一定の事柄などを受け持つこと「営業を担当する」「〇〇さんの担当者」など形式的で事務的に対応しこなしていくことを描く。

保育業界における担当制とはなんだろう数十年前から熱心に保育内容の見直しが進められた「ひとり、ひとりが大切に育てられるために」のスローガンのもと子ども一人一人の育ちを理解しその子に応じた対応や子ども達の生活を作っていくとする風潮が高まり実践され今日に至っている。



生まれて間もない頃から、常に母親を目で追っている。私は五感で母親を追っているとも思っています。母親が傍らにいて安心して手を伸ばしあそびはじめていきます。次第に母親を安心基地にして、いざ出勤、周辺の探索をはじめ遊びも活発になっていきます。

傍らにいて安心していただけの子が次第に離れ、姿が見えているだけの安心、気配が感じら

れるだけの安心、次第に母親との距離が出てきます。その頃には母親(大人)との関係に加えて、友達(同じ空間にいる子ども)にも関心を持つようになります。

お母さんの持つ安心感はどのように作られてきたのでしょうか、出産後、すぐに始まる子どもへの育児行為の積み重ねで育まれています。

生まれてまもなく母乳(ミルク)を飲ませてくれる、おむつを替えてくれる、眠い時には、心地よい言葉をかけてくれて心地よく眠れるように傍にいてくれる。泣いたときも笑ったときも一緒にいてくれる。自分が要求することに寄り添ってくれている。

肯定的な依存関係から安心感が生まれています。



保育者は絆で結ばれた関係の母親にはなれないが母親のような存在になり子どもの生活を支えたいという願いがあります。

母親のような安心感は保育園の生活でも同じ大人(保育者)が育児行為(食事・排泄・睡眠etc)にあたる必要があると考えています。

担当制の根拠とはこんなことなのでしょう。子どもからすれば傍にいてくれれば誰でもいいわけではない、大人の人数さえ揃っていればいいというものではありません。

## 生活の見直しと担当制

園生活において育児行為と言われる場面で同じ人(保育者)が同じようにかかわってくれることで子どもは安心して食事やおむつ替えなどの行為に向かうことができます。かかわる大人との関係性が安心感を抱くことにつながります。

又子どもなりの見通しを持つこともできます。おむつ替えの方法や食事の一定の流れなどにおいて、例えばおむつ替えでは右足をいれて次に左足を入れて、その次にそーっとお尻まであげ履かせていく、この流れの行為を同じ人が同じように対応していくと、子どもは最初に右足を動かし、次に左足を動かし、おむつがお尻付近までくると、自分でお尻を上げる。おむつ替えが終わると両手を保育士に向け伸ばして、ベットから起こしてと行為として伝える。

子どもなりの見通しや先の読み取りが見られるようになります。

保育において育児のやり方を詳細に決めていてもかかわる大人のひとりひとりの感覚、感性は異なります。かけられる言葉やそのしぐさ、表情もそれぞれに独自性があります。



子ども達が戸惑うことなく、子どもなりの見通しを持つことができるためにもできるだけ、決まった(同じ)保育士が関わるのが大切と考えます。

子ども達、ひとり、ひとは異なった家庭で過ごします。当たり前のことではありますが生活におけるタイムスケジュールも異なります。父、母親の勤務内容によっても登降園も異なります。6時に起床する子もいれば、7時に起きる子もいる。6時に朝ご飯を食べる子もいれば、8時にご飯を食べる子もいる。午前寝する子もいる。ミルクの授乳時間も異なる。ひとり、ひとり、生活のサイクルは保育園に来ても違いがある。遅い時間に朝食を食べている子は早い時間帯



の昼食では食が進まない。比較的、遅く登園してくる子が十分に遊んでいないまま食事や午睡に進めば、情緒の安定は崩れ不機嫌になる。

入園して3か月が経過して、もう一度、それぞれの育ち(発達)、家庭での過ごし方等を考慮して園生活の基盤(生活の流れ)を見つめ直し是正する取り組みをしています。

## 日課の見直し

その時々、行き当たりばつたりの保育など到底、肯定することはできません。

子どもの「やりたい やってみたい」に寄り添う保育を目指すと当然、それぞれの個人差に応じた日課が出てきます。

保育園というところは個々を大切にしながらも集団で生活するところ、個と集団の間で悩みも存在します。それぞれにできるだけ寄り添うことができるような集団(小集団)を整えてあげることによって個々に応じることが少しずつ定着できるようになってくると考えます。

集団生活ゆえに子どもが急がされたり、むだに長いこと待たされたりすることなく自分のリズムで自分の発達や興味、関心に合わせて生活できるように考えていく必要があります。子どもの園生活は遊び・生活・遊び・生活の連続です。大まかな日課の中にも子ども自身が見通しを持つような生活の仕組みを丁寧につくっていくことが大切と考えます。新年度がスタートして3か月、惰性で時間が経過してはなりません。もう一度、生活の基盤を考えていくことが今後の成長によりよくつながることと考えています。



(おぞら保育園 園長 廣部信隆)